

〈活動報告〉

「かもめの一日」をめぐる —被災地域での共創的な身体表現の試み—

西 洋子・永浦典子・三輪敬之

1. はじめに

東日本大震災以降、被災地域ではさまざまな活動が行われている。生命の救出や維持といった緊急な課題に対応する初期の段階がいくらか落ち着き、復興へと向けた日々の生活再建やコミュニティの再構築、次世代を担う子どもたちの未来へと向かう遊びの支援や教育活動も増えてきた。私自身は、人が生きることと身体で表現することのかかわりを、研究や実践を通して模索する者として、さまざまなご縁のもと、ささやかではあるが被災地域の子どもたちやその家族と一緒に、身体での表現を通して出会いつながり合うことを目指した小さなワークショップを、主に宮城県内で継続している。この試みは、身体表現の共創や共創の場のデザインの研究で、この数年間、共同研究を進めている早稲田大学理工学術院の三輪敬之教授ならびに研究室メンバーとの協働である。

さて、被災地域での身体表現活動とはいっても、関東で暮らす私たちには、当初は、どこで何を行えばよいのか見当もつかず、現地とのわずかなつながりを頼りに、各地域を訪ね歩きながらの試行錯誤を続けていた。それでも、月に1度ほどの割合で宮城に通い続けてみると、1年ほど経過した現在では、現地と関東とを表現でつなぐ共創の新しい形が、少しずつみえはじめてきたようにも思える。本稿では、私たちに、宮城との最初の出会いをもたらしてくれた名取市の永浦茉奈ちゃんとの表現活動を、お母様の永浦典子さんとともに振り返りながら、この1年あまりの被災地域での活動を報告していきたい。

2. 身体表現ワークショップを構想する前に

2.1. 現場に身をおく

実際の表現ワークショップを構想する前に、まずは、被害の大きかった地域を訪ね、現場に身をおくことから始めてみた。私たちが定期的な活動を開始した2012年4月は、震災から1年以上が経過した頃であったが、それでも、津波の痕跡が刻まれた海沿いの地に立つと、あの日以来、メディアから断続的に流れてくる情報を、現場とは離れた自分の日常の中で受け取る際とは全く異なる感覚が、身体に湧き上がってくることを実感した。

私たちは、現地での活動のコーディネーター役を担ってくださる知人のHさん（仙台市在住）の案内で、2012年の4月1日に名取市閑上地区（写真1）や亶理郡亶理町荒浜地区（写真2）といった、公的な交通が遮断された



写真1：名取市閑上地区（2012年4月1日）



写真2：亶理郡亶理町荒浜地区の瓦礫（2012年4月1日）

地域を訪ねることができた。閑上地区の一面には、奇跡的に残ったとされる神社跡の盛り土のような小高い場所があり、そこを訪れる人々の祈りの場となっていた。

長年、仙台で暮らしているHさんは、車から降りる度ごとに「ここには賑やかな街があつて、この場所に友だちの家があつた……」「ここには海釣りのできる海浜公園があつて、休日には一人でのんびりと釣糸を垂らした……」「ここには眺めの良い温泉があつて、家族でよくかけた……」とつぶやきながら、眼差しを彼方へと向けるのであつた。この場所が、自分自身のそうした記憶とは結びつ

かない私は、見渡す限りの灰色の風景に圧倒され、言葉なくただ呆然と立ちつくすばかりであった。いくらか落ち着き、目を凝らすと、遠くにかすむ海と眼前に広がる光景とのあまりのちぐはぐさに、身体が大きく揺らぐような心地がした。なぎ倒された木々や電柱、あちこちが陥没し途切れている道路、積み上げられた瓦礫が放つ不可解な色、かたち、匂い、そこに響きわたる波や海風の音、カラスの鳴き声……。それらがまとまって私の身体に入り込んでくる感じと、同時に現れるさまざまなイメージを言葉に置き換えることは大変に難しい。そうした理性的な作業よりむしろ、この光景と身体が受けた感触とを、忘れることなく留め保つように努めたい考えている。

2.2. 仮設住宅を廻る

続く5月には、石巻市の仮設住宅を訪ねた。震災直後からボランティアとして石巻市に入り、そのまま在宅の高齢者への支援活動を継続している作業療法士のKさんと理学療法士のDさんが、普段巡回している仮設住宅に私たちを案内してくれた。仮設住宅にでかける前に、多くの児童が被害にあった石巻市立大川小学校に立ち寄った。北上川沿いの本当に美しい風景の中、豊かな流れを湛える川に向かって校舎は建っていた。裏山には、津波の高さを示す印が刻まれていて、あの日、この校舎全体がのみ込まれたことは明白であった。

その後私たちは、海岸線に迫るように連なる山の、中腹にある公園の敷地内に建てられた小規模な仮設住宅を訪ねた。この地域の方々の生活の場である海からはもとより、街からも遠く離れたこの場所に暮らすのは、通勤や通学に影響のない高齢の方々ばかりとのことであった。天気の良い春の日の午前の時間帯にもかかわらず、戸外に人影はなく、室内のテレビやラジオの音だけが静かに響いていた。そんな中、小さな女の子があるお宅からでてきて、私たちを見ると逃げるように別の家へと駆け込んでいった。それでも外部からの訪問者が気になるらしく、玄関先から顔をのぞかせたので、声をかけ少しお話をしてみた。両親と学校に通う兄弟たちのいる街中の仮設住宅はとて狭いため、この山に暮らす祖母に預けられているという5歳児であった。この地区の仮設住宅には、女の子以外に子どもはおらず、日々をともにする人は全て高齢の方々である。つまりこの1年余りは、同年齢の子どもとの交流が極端に制限される暮らしを余儀なくされてきたことになる。復興へ

と必死で向かう大人たちの背後に、子どもたちのこうした現実もあるのだと知らされる思いであった。立ち話程度ではあったが、お祖母様とお話をすることができた。「あそび相手もしてやれなくてね、この子のためには保育園に通わせなくては」と話されたので、「大変なことなのでしょうが、近いうちにそうされるとよいですね」とお伝えした。

女の子が駆け込んだ家の奥から「よかったら、どうぞ」と声をかけていただき、私たちは、震災前は浜で仕事をしていたという高齢の女性のお宅に招き入れていただいた。「飲みなさい、飲みなさい」と、数名で押しかけた私たちのために、つい先日、まとめ買いをしたのだという缶ジュースをだしてくださった。初めて入る1DKの仮設住宅内は、まさに生活最低限のスペースのみの狭さではあったが、ベッドを兼ねた急ごしらえのソファーに、今日始めて出会った数人が並んで腰かけ、だされた飲み物を恐縮しながらいただく時間は、とても温かで豊かであった。テレビのローカル局から流れる復興関連ニュースを眺めながら、「誰もが大変だ、がんばらなければ」とつぶやいた横顔には、これまでの人生を海と向き合ってきた女性の、芯のある力強さと大らかな優しさが滲み出ている。

次に訪ねたのは、小さな川を挟んで、二つに分かれた仮設住宅群である。一方は規模が大きく震災直後に建てられたため、コミュニティとしての結集力が強く支援物資も多く届くとのことであった。ほんの数メートルの橋を渡るだけではあっても、二か所間の交流はほとんどなく、小規模仮設に暮らす方たちは閉じこもりがちであり、生活の不活性化に伴う身体的あるいは精神的な二次的問題の発生が危惧されるとのことであった。住宅の配置や集会所の場所、駐車スペースの位置、各戸の玄関の向きや形状など、災害時という急場には、十分に検討される余裕なく決められていく外的環境が、そこに暮らす人々の流れや交流のあり方に影響を及ぼし、その後の生活の質を左右する大きな要因となることが実感された。

三か所目は、石巻市内では最大規模という仮設住宅群であった。幹線道路に面し通勤や通学のためのバスも敷地内に乗り入れている。利便性が高いため、近隣に暮らす家族や親戚の訪問も多いようで、この日も何組かの家族の訪問場面を目にした。私たちが訪れた午後の時間帯には、移動図書館の車もやってきていた。

被災され、今なお仮設住宅での生活を続けている方々は、同じ市内では

あっても、それぞれの家族や個々人の置かれた環境によって、その暮らし向きは大きく異なっていた。共通しているのは、必死で生活再建を目指し「一日もはやく仮設をでたい」との願いであると、案内してくれたKさんが話していた。離れたい仮設住宅での日々の暮らしとどのように向き合い、それぞれの未来へとつなげていくのか……不条理ともいえる矛盾を含んだ深い問いを抱えながら、懸命に生きる人々の姿がそこにあった。

3. 永浦茉奈ちゃんとの出会いと表現

3.1. ニュース映像を通じて

震災が起きる以前から、Hさんから「機会があれば、宮城で会って欲しいお子さんがいる、表現で何かが変わるかもしれないから」とのお話をいただいていた。それが永浦茉奈ちゃんである。先天性ミオパチーという筋疾患の女兒で、呼吸器をつけ在宅で過ごしているとのことであった。訪問看護の仕事をされているHさんの奥様が受け持っているお子さんであることから、こうしたお誘いを受けたのであったが、雑事に紛れ、伺う機会をつくれなまま日々が流れていた。

震災からしばらく経過した頃、三輪を介してHさんからひとつのニュース映像が届けられた。甚大な被害を受けた仙台空港がアメリカ軍の援助を受けながら、物資輸送の要としての機能を取り戻すべく復旧へと向かうドキュメンタリー映像であった。現地では、昼夜を問わず懸命な復旧作業が行われており、それを担う一人として、航空管制運航情報官である茉奈ちゃんのお父様、永浦誠さんが取り上げられていた。ニュースは、こうした方々もまた被災者であり、家には安否を気づかう家族がいることを伝えていた。そして、茉奈ちゃんとお母様の典子さんの様子が紹介されたのである。地震直後には、近所の人々の車に同乗して家を離れ津波の被害を免れたこと、電源が確保できない中、茉奈ちゃんの呼吸器を手動の蘇生バックに切り替えて、それを押し続けながら避難したことなどを、典子さんご自身が語られていた。その時、傍らのベッドに横たわる、小さく不安げな様子の茉奈ちゃん（当時5歳）が映し出されたのである。

3.2. 永浦さんのお宅に伺う

2011年9月15日、Hさん、三輪、西の3名は、夕方の時間帯に永浦さんのお宅に伺った。Hさんと待ち合わせた仙台駅周辺は、夕方のラッシュアワーの時間帯のためか、沢山の車で込み合っていて、車内から目にする限りにおいては、震災の影響は感じられないほどの賑わいを取り戻していた。しかし、有料道路で名取市に向かうと、周囲の風景は一変し、あちらこちらに津波の跡が生々しく残っているのであった。多くの家が流されたという一帯では、数件の民家が、露わとなった枠組みだけを残し風雨にさらされている光景や、海から流れついた漁船が、地面に突き刺さった状態で放置されたままの光景が目に入った。永浦さんのお宅のある新しい住宅地は、周囲のそうした状況とは異なり、家が流されたような形跡は見当たらなかった。永浦さん宅も一階部分は浸水したとのことであったが、本来の地形や、周囲を流れる小さな川の影響で、同じ地区ではあっても被害状況は大きく異なっているらしかった。

初めてお宅に伺う私たちを、茉奈ちゃんのご両親はとても温かく迎え入れてくださった。初対面の茉奈ちゃんは、映像よりもさらに一回り小さく感じられたが、突然の訪問者である私の顔を、珍しそうに眺める瞳が実に印象的であった。その後、Hさんの知人で仙台フィルハーモニー管弦楽団の打楽器奏者である竹内将也さんも加わった。

「私に、何かできることがあるだろうか」と不安に感じながらも、具体的な案を持ってないままの訪問であったが、ご家族の温かな雰囲気と、茉奈ちゃん自身の好奇心いっばいの眼差しに後押しされて、「きっと、何かできるだろう」とベッドサイドでお話をはじめてみた。以下は、茉奈ちゃんとの初めての表現について、直後に記した記録の一部である。

3.3. 「かもめの日」第1回記録（2011年9月15日）（写真3、4）

茉奈ちゃん（5歳女兒）は、筋疾患で人工呼吸器を装着し、寝たきりの状態にある。ご家族の話によれば、日常的な言葉は理解しているとのことであるが、自ら話すことは呼吸器の影響で困難なようで、ようやく聞き取れるほどの音量で単語を発話するのが精一杯である。茉奈ちゃんのご自宅のベッドサイドで、まずは挨拶を交わしながら、いろいろとお話してみた。言葉の

リズムにのせて、彼女の身体に触れながら、可動部位を探した。一緒に活動した30分程の時間の中で、私が探し得た彼女の動く部位は、腕と手の親指と足の裏の真ん中あたりで、その動きは「かすかに」というほかは描写できない状況であった。



写真3、4：茉奈ちゃんとの出会い「かもめの一日」(2011年9月15日)

その3つに、私はそれぞれの指で触れながら、まずは動きでやりとりを行った。軽くタッチしたり、少しゆっくりと押したり……茉奈ちゃんの反応はとてもよく、私の働きかけに応じて、最初はそれと同じリズムでその部位を動かすことが繰り返された。そのうち、会話のように、私の呼びかけに応じて彼女なりの表現が返ってくるようになり、そうなると、二人のあいだでストーリーが展開しはじめた。そこで、最も動かしやすそうな親指と私の人差し指を合わせ、「手合わせ表現」のようにいろいろな動きを試してみた。私たちの世界にスピード感がでてきたので、空を飛ぶよ……と促すと、私のそばに茉奈ちゃんが同調してきた。鳥の話をしていたら、「家の前のカラスは、鳴き声がうるさいから嫌いなんだよね」と後ろからお母様が教えてくださったので、「白い鳥もいるんだよ……かもめにしましょう」とかもめが主人公のお話になっていった。白いかもめが空を飛んで、海にざぶんとび込んで……と動きはじめると、とても生き生きとした表情になって、懸命に親指を動かしはじめた。「沢山あそんでお腹がすいたから、ごはんを食べましょう」と、今度は足の裏に移って、餌をついばむように彼女の足の裏の真ん中をつつくと、それにに応じて、リズムカルに足の裏を動かした。「お腹もいっぱいになったから、おやすみなさい……だね」というと、今度は自ら顔を閉じて表現した。二人のあいだに生まれる物語をからだで表現する力に溢れていると感じた。

茉奈ちゃんと私との表現の試みでは、身体や動きという行為的側面だけを取り出すと、彼女の側はほとんど反応していないようであっても、私は茉奈ちゃん自身とからだで出会い、私たちの世界を創り合ったと実感し得る時間をもつことができた。彼女の身体のかすかに動く三つの部位から編みあげた三つの場面を、二人で幾度となく繰り返しながら、私たちなりの「かもめの一日」という物語を創った。そのときの私たちの出会いと創り合った表現世

界は、茉奈ちゃんと私だけに閉じたものではなく、表現の場に居合わせた彼女のご家族や介護に携わる人々にも伝わり得るものであったと思う。

3.4. 震災後の茉奈ちゃん

次に、本稿をまとめるにあたり、茉奈ちゃんの母親である永浦典子さんが記して下さった文章の中から、震災後の茉奈ちゃんの様子に関するものをご紹介します。

震災後のこと（永浦典子）

震災直後は電源確保ができなかったのと、自宅の浸水のため、病院に2週間程入院しました。その後、3ヶ月のアパート生活を経て自宅に戻りました。娘は自宅に戻ると発熱、嘔吐を定期的に繰り返すようになりました。嘔吐物は出血した後の赤黒いものでした。これは、胃で出血しているためで、原因はストレスが考えられるとの話でした。この症状は半年くらい続き、この嘔吐で体重も少し減り、弱々しく感じられるときもありました。

津波で私の実家が流され、夏からは祖父母との同居が始まりました。これは茉奈にとってよい影響だったと思います。毎日話しかけてもらえるのと、私達とは違う別の刺激を与えてもらえたのではないかと思います。

今思えば、私が茉奈ちゃんと最初に出会った2011年9月は、上記のような震災直後の状況を経て、ご家族がいくらか落ち着いた日常を取り戻された頃ではなかったかと思う。茉奈ちゃんが、実際のからだよりもさらに小さく感じられたのは、被災地の多くの子どもがそうであるように、被災時の大きなストレスを内に抱え、それを解き放つ術を見出すことが難しかったからなのかもしれない。一方で、茉奈ちゃん自身の発達や、ご親族との同居という環境の変化もあって、新しく出会う世界に主体的に向き合う準備ができていた頃のようにも思われる。私たちの「かもめの一日」は、そうした時機だからこそ生まれた、大切な表現である。

3.5. 「かもめの一日」をめぐって

「かもめの一日」(永浦典子)

西先生が茉奈と一緒につくってくださった「かもめの一日」のお話。かもめが空を大きく羽ばたいて、またお家に帰って休む。茉奈は一生懸命かもめになろうとしていました。両手で大きく羽ばたくことはできないけれど、自分の動かせる精一杯の力、かすかすけど自分の親指を動かし、かもめの羽になって空を翔ぼうとしていました。動かせる部位はほんの限られた一部であっても、そこを精一杯動かすことで自分の表現にできる。先生に動かせない体の一部になってもらって、大きな表現ができる。そんな新しい楽しさを発見できた「かもめの一日」のお話です。そしてこれが先生と娘との出会いでした。

それぞれの身体を介して表現を創り合う際に生成する生き生きとした感覚や、私たちの新しい物語がからだから生まれでるときの自己と他者との一体感は、私自身の内側の柔らかな部分にしっかりと刻まれていくのだと思える。それは表現を終えた後も、目の前にいない相手を思い、その無事や成長を願う気持ちへと連なっていくかのようなのである。茉奈ちゃんとの「かもめの一日」をひとつの契機として、私は、茉奈ちゃんやまだ出会っていない被災地域の子どもたちと一緒に、新しい表現を築いていきたいという思いを強く抱くようになっていったのである。

そのようにして、2012年4月からは、定期的な活動をはじめの意志を固めたものの、本稿の冒頭で記したように、どこで何を行ったらよいのか、皆目見当がつかない状況であることに違いはなかった。そこで私たちは、Hさんとも相談をしながら、まずは、現場に身をおくことから始めてみようということになり、4月1日に被災地を訪ねたのである。そして翌日の4月2日には、再び茉奈ちゃんのお宅に伺った。

今回は、竹内さんとバイオリニストの奥様、そして茉奈ちゃんと同じ年頃の二人のお子さんたちを交えての賑やかな訪問となった。以下、前回と同様の当時の記録である。

3.6. 「かもめの日」第2回記録（2012年4月2日）（写真5）

前回同様、Hさん、三輪、西で永浦さんのお宅を訪ねる。竹内さんご夫妻と二人のお子さんも合流する。



写真5：茉奈ちゃんとの2回目の表現「かもめの日」
（2012年4月2日）

前回から半年が経過していることもあって、茉奈ちゃんのからだは随分と大きくなり、表情もしっかりとしてきたという印象があった。お母様のお話では、4月から入学した支援学校は、訪問で学ぶことは選ばずに、通学にしたとのことである。その方が、外出の度ごとにいろいろな刺

激があるだろうし、お友達との出会いもあるからと説明してくださったので、「よい選択ですね」とお話した。それでも、現状では、週に3回程度学校にでかけることが精一杯のようである。

竹内さんがいろんな楽器を準備されていたことや、竹内さんのお子さん二人もご一緒であったことから、音遊びの時間や新しい友だちと一緒に遊ぶ時間を優先したほうがよいと考え、しばらくは後ろで見ていることにした。印象的だったのは、竹内さんのお子さんが持参した、人とつながると音がでるという遊具での遊びであった。茉奈ちゃんはその意味をすぐに理解したようで、また、わずかな手の動きに音が反応するのが面白いようで、何度も繰り返してあそんでいた。竹内さんが手持ちの小さな鉄琴のような音のでる楽器を使って、茉奈ちゃんとの音遊びをはじめた。その楽器を使って、そのまま私と茉奈ちゃんが遊んでいたとき、偶然にも小さいけれど思わぬ動きがでて、音が鳴った。その瞬間、茉奈ちゃんの表情がとても生き生きと輝いた。私の瞳を覗き込み、「ねえ、今の音、聞いた！」と言わんばかりであった。「わー、おもしろかったねえ」と感動を共有したら、とてもうれしそうな表情を見せていた。次いでお母さんに代わったが、お母さんはあらかじめここで音がでるという瞬間を決めて、ご自身が茉奈ちゃんの手をもって動かしていた。「こんな風にするから、私、嫌われるんですよね」と苦笑していらし

たから、親としての思いが先行してしまうことを十分に自覚されているのだと思った。

竹内さんの準備された音遊びも一段落したので、今度は身体表現を試みることにした。最初に遊んでいるときには、私のことは思いだせないようであったが、からだで「かもめの一日」の表現をはじめたら、すぐに思いだし、次の場面で動かす部位を自ら積極的に動かしていた。小学校に入って、外出の機会が増えた茉奈ちゃんの日常に思いを馳せ、かもめが公園のすべり台で遊ぶダイナミックな場面をつけ加えた。しっかりと眼差しを交わし、生命感あふれる内なる自己が表現されているように感じられ、前回からの大きな成長を感じた。

4. 宮城県内での小規模ワークショップの試み

茉奈ちゃんとの「かもめの一日」の表現を大きな契機に、私たちは現地で出会った人々の人的なネットワークに支えられながら、新しい共創のあり方の模索を実際にはじめることとなった。

5月の仮設住宅訪問を経て、7月初旬からはHさんや、Kさん、Dさんにコーディネートをお願いして、石巻市や東松島市といった津波の被害の大きかった地域で、子どもたちやその家族、児童デイサービスに通う障害のある子どもたちなどを対象とする共創的な身体表現のワークショップを試みていった。加えて、現地の病院や、地域を巡回しながら高齢者支援を行う作業療法士等の医療関係の方々や、海外や他県から現地に入り、ボランティアとして支援を続けている方々との小規模なワークショップを継続した。

こうした地域での滞在期間中、ふと目にする景色は、本当に心痛むものであった。石巻市の日和山公園から臨む街と海、焼け焦げた市立門脇小学校の校舎（写真6）、未だ街中に残る沢山の瓦礫……。そうした中で、人々の日常は当たり前のように営まれてい



写真6：石巻市立門脇小学校（2012年8月10日）

るのである。大人たちは、そして子どもたちもまた、誰もが大変な状況であり、震災時の経験や現在も続く困難な生活の様子を、黙って聴かせていただくことが私たちにできる精一杯であった。しかし同時に、茉奈ちゃんやご両親とのように、ワークショップに参加してくださる一人一人と、身体での表現を通じた印象深い、多くの心弾む出会いにも恵まれたのである。

こうした試みを継続する中で、特に子どもたちとの身体表現を通じて、私自身の中に気がかりに思えることが生じた。それは、言語表現が未成熟な子どもたちや障害のある人々は、身近な大人たちが生活再建へと奔走する中、被災時やそれ以降に抱え込んだ感情や日常の情動の表現を、自然に抑制する傾向にあるのではないかということである。このような傾向は、被災地域において生活上の困難を抱える人々に携わる医療関係者や支援者においても同様であった。ワークショップに参加してくださった方々は、自分の身心をみつめる経験や、身体で他者と表現を創り合う原初的な経験を通じて「本来の自分を表現し他者から受容されて楽になった」「あせている自分がからだに表れていることに気づいた」「変なしがらみや不安が減り、様々な可能性に思いを巡らせた」といった感想を多く寄せてくださったのである。

5. 仙台でのワークショップとパフォーマンス

このように、被災地域での共創的な身体表現ワークショップの試みを重ねることと並行して、私たちは仙台フィルの竹内将也さんとの共同プロデューズとして、仙台市でのワークショップの計画を進めていった。当初は、竹内さんのパーカッションのコンサートに、三輪研究室が研究開発したシャドウメディアを用いるという企画であったが、竹内さんとお会いする中で、三輪からコンサートと併せて宮城と関東の人々が一緒に表現を創り合う、身体表現のワークショップやパフォーマンスを行ってみてはどうかというアイデアが提案されたのである。竹内さんは「地元の役にたつことであれば」と、この企画を快く受け入れ、実現に向けて地元仙台を東奔西走された。また、ご自身の演奏活動の合間を縫って、何度も東京に足を運ばれ、詳細な打ち合わせを重ねたのである。

『“ひびき”げんきッシモ!!』と題されたイベントには、私自身がディレクターを務め、東京で活動している「みんなのダンスフィールド」(Inclu-

sive Field for Dance) のメンバーが、非常に大きな役割を果たしてくれた。1998年に活動を開始した「みんなのダンスフィールド」では、コミュニティを基盤にインクルーシブな新しい身体表現のあり方を模索しており、幼児から高齢者までの約40名のメンバーは、年齢や性別、障害の有無や経験の差異のあるさまざまな個性で構成されている。



写真7：仙台市での身体表現ワークショップ
(2012年10月14日)

共創的な身体表現活動による出会いやつながりの創出を希求する「みんなのダンスフィールド」は、震災直後から被災地域と一緒に表現を行う機会をと願っていたが、力不足のためなかなか実現できずにいた。宮城と関東をつなぐ多くの方々のご尽力によって、このような機会を得たことで、車いすの子どもたちを含む25名あまりのメンバーは、仙台に出かける意志を自ら明確にし、東京での作品づくりやワークショップの準備に積極的に取り組んだのである。

そして、2012年の10月14日、仙台の定禅寺通りに面した「せんだいメディアテーク」を会場に、竹内将也氏主催の『“ひびき”げんきッシモ!』の一部として、早稲田大学三輪敬之研究室および「みんなのダンスフィールド」の協力の下、宮城と関東のさまざまな人々が、表現で出会い、表現でつながるワークショップとパフォーマンスが行われた。当日は、三輪研究室の学生12名と東洋英和女学院大学の西ゼミの学生11名も運営スタッフとして、またワークショップ参加者・パフォーマンス出演者として、会場のあちこちで地元の方々との交流を築くことができたのである(写真7)。

6. 生命の時間

せんだいメディアテークでのパフォーマンスでは、「みんなのダンスフィールド」の作品上演(写真8、9)と併せて、「かもめの一日」を多くの観客の方々に観ていただいた。茉奈ちゃんのひとつひとつの動きに込められた、精



写真 8, 9 : みんなのダンスフィールドメンバーによる仙台市でのパフォーマンス(2012年10月14日)



写真 10 : ワークショップでの茉奈ちゃんと永浦典子さん (2012年10月14日)

一杯の表現と思いが伝わるように、三輪研究室のスタッフが、茉奈ちゃんの指や臉の動きをカメラで捉え、その映像を舞台後方のスクリーンに映し出していった。会場に集った方々は、誰もが息を吞んで私たちの表現を見守り、温かい大きな拍手をおくってくださいました。また、この日茉奈ちゃんをご両親は、宮城と関東の100名あまりの人々がともに表現するワークショップにも参加した(写真10)。子どもも大人も、障害のある人もない人も、初めて出会う様々な人たちが一緒になって、それぞれのからだや動きで新しい表現を創り合う時間と空間は、“響きあう未来”へとつながる人々の生きる姿そのものであると感じられた。表現が即興的に紡がれていくワークショップの中盤では、茉奈ちゃんを囲んだ20名ほどのグループによって、大きな朝顔の花が咲く様子が表現された。その朝顔の瑞々しい生命感に、その場に居合

わせた人々は自然な笑みを交わし、花開くまにその瞬間には「わー」という感嘆の声とともに大きな拍手が会場全体を包んだのである。ワークショップを客席で見学されていた方々も含め、この場に集う多くの身心が、表現で

ひとつにつながり合っていく“生命の時間”が、被災地に生まれでたような光景であった。

からだの表現（永浦典子）

「みんなのダンスフィールド」のパフォーマンスのフィナーレで、みんなが舞台上で自由に踊って楽しく動いていると、客席にいた茉奈は、目をキラキラさせ、私の目と舞台とをすごい勢いで往復させています。自ら、客席ではなく舞台に行くと言ったのです。これには本当に驚きました。「楽しいあの人の輪の中に入りたかったんだ！」と嬉しくなりました。父親と一緒に舞台上に出て行った茉奈を、客席から見守りながら「みんなの輪の中に一緒にいることで、自由に体を動かさなくても茉奈は踊れているんだ」と思いました。

たくさんの方々にも囲まれ一緒に楽しそうに踊る娘をみて、大空を自由に翔ぶかもめのように、私自身の心が解き放たれてふっと軽くなったかのように感じられました。狭まりがちだった日常が、茉奈の笑顔でまた一歩前へ踏み出せそうに思えたのです。茉奈と一緒に、私達も翔ぶことができたのです。

7. おわりに

茉奈ちゃんに誘われて宮城に通い、10月の仙台でのワークショップで生まれた“生命の時間”を確かな足跡として、私たちの活動は次なる段階へと向かっている。石巻市では、8月に行った児童デイサービスの子どもたちとのワークショップを引き継ぐかたちで、作業療法士のKさんが、施設の先生方の理解と協力の下、子どもたちとの定期的な身体表現活動を継続している。Kさんと私は、メールでのやり取りや直接会う機会を設け、活動の様子や身体表現の援助のあり方に関する意見交換を続けている。一方、東松島市では、地域の方々の熱意と連携によって、障害のある子どもたちを含むさまざまな人々が集う身体表現のグループが生まれつつある。私たちは、こうしたグループと関東とを表現でつなぐ共創のデザインを構想し、共に表現を創り合う仲間として、関東での緩やかな組織づくりに取り掛かった。12月から月に1度、東松島市の赤井地区で行うこととなったワークショップに

は、私たちのほかにも、さまざまな領域の専門家や学生たちが一緒にでかけるようになってきた。ゆっくりとした歩みではあるが、その輪は少しずつ、確実に広がっていると感じられる。一方で、こうした共創を実現するためには、種々の問題と粘り強く向き合う力も必要となる。人と人との出会いの場では、さまざまな戸惑いや思いがけないズレも発現する。現地での宿泊や移動の問題、活動資金といった現実的な課題も徐々に解決していかなければならない。しかしながら、これらもまた、私たちみんなの大切な表現の一部である。「かもめの日」で、茉奈ちゃんが自らの身体と表現で示してくれたように、つながっている大空で、吹く風と戯れながら、未来へと共に“翔ぶこと”を叶えていきたいと思っている。

謝 辞

この1年間、宮城県での身体表現活動に携わってくださった多くの方々に深く感謝いたします。とりわけ、私たちを温かく迎え入れ、本稿執筆にご協力くださった永浦誠さん、典子さん、茉奈ちゃんのご家族、そして、県内でのワークショップのコーディネートをしてくださったHさん、Kさん、Dさんにお礼を申し上げます。また、本稿をまとめる機会をいただき、多くの励ましと貴重なご示唆をいただいた、東洋英和女学院大学・死生学研究所所長の渡辺和子先生にお礼を申し上げます。なお、掲載した写真は、三輪敬之および三輪研究室スタッフが撮影したものです。また、実践活動の一部は、文部科学省科学研究費補助金（基盤（C））「“表現の多様性”を育む感性的メディアのデザインと活動モデルの開発」（平成22-24年度）（課題番号22500553）の助成によるものです。記して感謝いたします。